

トウゴウヤブカが海岸の潮溜りに発生することなどは知床以外でも極めて普通に見られることである。邦産のチシマヤブカ及びホッコクヤブカについては従来雌雄各成虫の外部生殖器しか報告されていなかったもので、幼虫、蛹、成虫について一貫した記載をおこなった。

ショウジョウバエの囲蛹殻前気門の比較形態

岡田 豊 日
(都立大・理・生)

日本産ショウジョウバエ科、2亜科8属約50種の囲蛹殻について、前気門特にその分枝の系統的分化の有様を追求した。分枝は最少4本から最多28本を数え、その配列状態には数型が認められ分類体系と密接な関係を示す。一般に系統的に進んだ群では分枝が多くかつ長くなり、気門柄も長くなる。しかし分枝と柄との長さの比は、進んだ群ほど小さい値をとる傾向がある。horn index, すなわち前気門長と囲蛹殻長との比は、0.02ないし0.36を示し、この比も進んだ群におけるほど大きい。前気門長の系統的増大は、蛹の呼吸を容易ならしめる点で有利である。気門柄が伸長とともに屈曲を示すのも、蛹体が食餌中に埋没するのを防ぐのに役立つ。従ってかかる諸傾向は環境への適応現象であって autonomous ないわゆる定向進化の現象ではないといえる。

鹹水性白点病虫の消長

広崎 芳次・北村 晴男
(江ノ島水族館・資源研)

1961年1月より3月に亘って、全国35水族館で調査した結果では、最も困っている魚病として鹹水性の白点病があり類似症を含めると81%の水族館でこの対策に苦慮していることが判明した。

鹹水性の白点病には、少なくとも *Ichthyophthirius marinus* 及び *Oodinium* sp. の2つの原因があると考えられるので、これら原虫の予備観察を江ノ島水族館で1962年4月より8月に亘り毎週一回観察可能の飼育海水魚類約200種について行った結果、*I. marinus* 及び *Oodinium* sp. とともに魚体表面 1 cm² に 30~50 の原虫をかぞえ、魚1尾あた

り万単位をもって数えるほど寄生することが判り、且つその消長が激しいことを認めた。更に板鰓類などには寄生し難いという魚種による選択性も認められた。

Oodinium sp. の場合には、1/250万の CuSO₄ 溶液の連続処理で著効を認めた。

水藪中の原生動物相

羽田 良 禾
(鈴峯女子短期大学)

水藪湿地の水藪間を常住場所としている下等動物には原生動物のほか *Tardigrada*, *Rotatoria*, *Nematoda* などがある。水藪中の代表的動物群である原生動物のなかでは有殻の変形虫類が最も多く何処で採集した水藪からも必ず数種が見出される。この類のほかには鞭毛虫類では *Dinoflagellata* に属する *Peridinium cinctum*, *Chalubinskia tatrica*, *Euglenoida* に属する *Euglena*, *Trachelomonas* など、太陽虫類では *Heterophrys spinifera*, *Clathrulina elegans* が見られ、繊毛虫類も稀に見出される。これまでに水藪中から検出した有殻変形虫類は偽足が棍棒状あるいは葉状の *Lobasia* (棒状根足亜綱) に属する16種と糸状の *Filosia* (糸状根足亜綱) に属する18種である。後者のなかには両端に口孔の開いた殻をもった *Amphitrema wrightianum* も含まれている。到る処の水藪湿地で普通に見られる種は *Diffugia constricta*, *Nebela americana*, *Heleopera picta*, *Arcella artocrea*, *Centropyxis laevigata*, *C. aculeata*, *Pseudodiffugia gracilis*, *P. horrida*, *Euglypha alveolata*, *Trinema enchelys* などで、いずれの種も分布が広い。北海道だけから採集された種は *Paulinella chromatophora* ただ1種である。

繊毛虫 *Chlamydomon* の梁器の細胞化学的研究

兼田 正 男
(広島大・教養・生)

広島市の淡かん水の溝にすむ *Chlamydomon pedarius* の細胞口に付属する梁器について細胞化学的実験をした。この繊毛虫の梁器は11~13本の鞭